

## 会 議 記 録

高松市附属機関等の会議の公開及び委員の公募に関する指針の規定により、次のとおり会議記録を公表します。

会議名	第3回高松市創造都市推進懇談会（U40／第4期）
開催日時	平成31年4月25日（木） 18時30分～20時40分
開催場所	高松市役所3階 32会議室
議 題	（1）事業アイデアについての意見交換
公開の区分	<input checked="" type="checkbox"/> 公開 <input type="checkbox"/> 一部公開 <input type="checkbox"/> 非公開
上記理由	
出席委員	徳倉会長、穴吹副会長、中村かおり副会長、大崎委員、大美委員、熊野委員、桑村委員、瑞田委員、中村香菜子委員、西谷委員、若林委員
市職員	長谷川、森、武田、田村、三谷、美濃、杉原
関係課	政策課ユニバーサルデザイン推進室、コミュニティ推進課、障がい福祉課、保健センター、産業振興課、農林水産課、観光交流課、文化財課、スポーツ振興課、生涯学習課
事務局	多田参事、田井部長、西岡課長、三浦係長、松下
傍聴者	1人      （定員 5人）
担当課及び連絡先	産業振興課 創造産業係 839-2411

### 審議経過及び審議結果

#### 1 開会

##### 【会長】

今日の会議では、先日、事務局からメールでお送りしたとおり、皆さんから御提案いただいたアイデアを市の関係課に参画希望のあり・なしを判断していただいております。参画希望ありと回答いただいた関係課の職員の方には、本日、会場にお越しの順に皆さんと意見交換をしていただく予定です。その意見交換の結果、今後の展開として「○、△、×」をそれぞれのアイデアごとに判断いただくつもりです。そういったイメージを持っていたら、後半の全体共有のところで、こういう「○、△、×」の簡単なイメージを共有していただきます。また、参画希望はなかったアイデアについても、もっとこういうふうに表現したいことがある方につきましては、会議が終わった後に会長チャレンジということで、御時間を設けてお話を聞かせていただきます。全体の進行表は、皆さんの御手元に配付されておりますので、この順番で、順次、進行を進めていこうと思っています。Bグループは、急遽欠席の方がいらっしゃるの、その方を除いて、進行をしていただければと思います。ここで大事なのは、意見交換していただいて「○、△、×」というふんわりした形かもしれませんが、ある程度方向性を出して

## 審議経過及び審議結果

いただくということが、大事なポイントになりますので、そこはしっかりお願いしたいと思います。それでは、各グループに分かれて、各関係課とU40委員とで意見交換をしたいと思います。事務局の方々は、適宜、入っていただいて結構ですし、関係課の方も、自分の担当じゃないところでどんな話をしているのか、グループに入ってお聞きいただいて結構です。ではよろしく申し上げます。

### 2 議題（1）事業アイデアについての意見交換

#### — A 班 —

##### 【委員】

私がアイデアについて御説明いたしますと、食の現場で何が問題なのかというと、食べる消費者側と生産者側とが切り離されているという点があると考えています。どういうふうに作られているのか知らない人が多いですし、仕組みに興味がない人も多いです。結局、人間は生きていく上で食べないと死ぬので、食べるということに皆がもっと興味を持つべきだと思いますし、高松・香川というところは、土地は狭いですが、農業では多くの品種を作っていますし、多くの魚の種類もいることをもう一度しっかりと知って、両者がつながってもらいたいと考えています。作り手から消費者までの間に色々な業者も入っているので、そういった人たちも含めて、つながりを持たせられればと思います。ただ、そういう機会はなかなか持てず、端から端までのつながりを見直すことで、新しい変化も生まれるのではないかと考えています。具体的に言うと、農家さんのところに出向いて、みんなで料理して食べましょうというアイデアです。その場に、色々な業者さんも加わって、ワイワイ言いながら食べると、色々な話も聞けると思うんです。人数としては、大規模なものより、少ない方がいいと思っています。

##### 【委員】

市の具体的な助成事業というものはどのようなものなのでしょうか。

##### 【農林水産課職員】

農林水産課が関わっている外郭団体で、高松市農産物ごじまん品推進協議会という団体がございます、「食の教育活動支援事業」という事業の中で、色々な体験を民間の団体さんが提案されて独自に実施している事業があります。一か所当たり 5 万円の事業がございます、実施主体としては、小学校やNPO法人でしたり、色々な団体が申請していただける事業です。去年の実績としては、子ども

も会でフラワーアレンジメントをしたりしています。一つ条件がありまして、高松市産ごじまん品という市の制度で、高松市産の農産物で数点選定しておりまして、それをPRするための事業です。やり方は多々ある中で、その品目を使って何かをしていただく必要があります。それを念頭に御提案していただき、助成をするという制度です。

【農林水産課職員】

いかんせん周知が不十分なところがありまして、この場で御説明させていただいているところです。昨年度の実績も1件でした。

【会長】

例えば、5万円の補助は受けつつ、協賛方式とか寄付とか参加費なんかを合わせて、例えば総事業費を20万円ぐらいの規模で行うことは問題ないのでしょうか。それとも、5万円の範囲で行わないといけないといったような条件があるのでしょうか。

【農林水産課職員】

それは問題ないです。活動が事業の趣旨さえ汲んでいただければ、協議会の助成金を事業費に上乗せしていただくことは大丈夫です。

【委員】

予算規模なんかはイメージできてないですね。

【会長】

例えば、素材の調達に5万円を使用するという事は、可能なんでしょうか。

【農林水産課職員】

例えば、昨年度のフラワーアレンジメントは、講師料とお花代という使い方をしています。

【会長】

つまり、ごじまん品のPRが出来れば良いということですね。

【委員】

このアイデアの肝が、食材の取れる畑に行って、取って、食べるという体験をしてもらいたいと思っています。

【農林水産課職員】

農家の方も協力してもらえるとと思うんですが、料理する人も必要なんですね。

【委員】

そこもポイントで、農家と消費者だけでなく、間の流通業者や加工業者といった中間業者も参加してもらおうつもりです。料理人も含まれると思うので、そこはポイントだと思っています。

【会長】

提案者が市にお願いしたい部分は、どの部分なんでしょうか。例えば、人はもう呼べる当てがあるので、資金があればよいのか、市の後援があればいいのか、それとも中間業者をいっぱい知っているが、生産者は詳しくないので紹介してほしいだとか、そういうリクエストはありますか。

【委員】

もともと、中間業者であったり、市場の方であったりというのは、お付き合いさせていただいています。私の仕事が、結構、独立してしまっていて、周りのことを知らないまま行っていることが多いんです。消費者や流通業者にどういうふうにものを届けていったらいいのか、よく分かっていないことが多いと思ったんです。こういった場のように、顔を見ながら話したりしてつながりが持てることで、もしかしたら今ある動きがいくつか解決したり、新しいことができるんじゃないかなってというのがあって、色々な食に関する人たちを呼んできたいと思いました。

【会長】

あえてお聞きしたいのが、畑でないと駄目なんでしょうか。なぜかというと、催し物をするとなったときに、天候に左右されたりするので、できるところから口に入るまでというトレーサビリティというものを高松市なりの考え方でやっていきましょうとなったときに、例えば、市場で生産者に来てもらって、こういうふうに加工作されているんだなっていう説明ももらいながら、雨風をしのげる場所で実施するというのもいいかなと思いました。

【委員】

畑にこだわっているのは、単純に「子ども」というところだけです。なので、

そこの形は変わってもいいと思っています。大事なのは、生産から消費までの関係者がそれぞれいることだと考えています。

【委員】

市としてのトレーサビリティに関連する事業は何かあるのでしょうか。

【農林水産課職員】

物流が成立しているのですが、それが当たり前になってしまっているということだと思います。

【会長】

ごじまん品の中でこれを押したいという品種はあるのでしょうか。

【農林水産課職員】

まだまだこれからの話ですが、今後、ごじまん品の品種を見直してはどうかと考えています。今は高松市で収穫可能な品種を全て載せているだけなので、本来ある「ここだけ自慢」などの基準をもっと考慮した方がいいのではないかと考えています。あと、先ほどの畑で実施するというお話でいうと、一種類しか採れないので、色々な調理をしてその素材の味を楽しむということが大事になってくるのではないかと考えています。

【委員】

料理人に入ってもらうというのは、消費者にとってどう食べたらいいのか分からないというところの解消も含めてできたらと思いました。

【農林水産課職員】

以前は、ジャガイモを収穫して、10品作るという料理教室をしました。香南アグリームというところで、10数家族の30人ぐらい参加があって、テーブルごとに違う料理を作っていただくというものでした。香南アグリームは香南町にある市の施設で、農場だけでなく工房もあり、農業体験をすることができる施設です。

【農林水産課職員】

収穫体験の料金については、指定管理者が、品目ごとに何円だつたりと定めている形です。

【会長】

市のこれから取り組もうとしている事業で、協力できそうな事業は何かありますか。

【農林水産課職員】

2月に「食と農のフェスタ」というイベントを開催してまして、その1ブースを使って、そういう食育というPRをやっていただくとかの余地はあると思います。

【委員】

助成される5万円というのは、一回ごとに受け取れるということによろしいでしょうか。

【農林水産課職員】

同一年度内で、一団体につき一回限りだったと思います。

【委員】

今のアイデアを実施するときの規模としては、金額が少ないという感じですね。なので、大きいイベントで一度実施して見てきっかけを作るか、継続性をもって関係性を持つかのどちらかになると思います。

【委員】

個人的なイメージとしては、来た人が皆しゃべれるように、規模はあまり大きくないもので考えています。

【委員】

となると、少人数で複数回行うということになるでしょうね。助成金を複数回使用できればベストなのですが。

【会長】

U40側で一度、持ち帰って、提案者に考えてもらいながら、協力してもらえる企業を見つけてもらうとか、委員の中にも農家さんがいらっしゃるの、どんな協力をしてもらえるのかなどといったことが考えられるので、そこからまた農林水産課さんにも相談させていただければと思います。「食と農のフェスタ」は、生産者の方も来るし、中間業者の方も来るので、一挙両得のような感じがしますね。

【農林水産課職員】

そういった場を活用いただけますと、我々としても非常に有難いです。やはり、毎年同じ人が同じようなことをしているので、御提案のような新しい切り口を提供していただけたら、他の出展者にも波及していくと思うんです。

【委員】

逆に農林水産課からも、ごじまん品に限らず、制度などをもっと知ってもらいたいということを投げかけてもらえることもありがたいことだと思います。

【会長】

それでは次のアイデアに進みたいと思います。まずは、提案者の方から、御説明をお願いいたします。

【委員】

先ほどのアイデアと似ていることがあるのですが、一度、アイデアを出させていただいた後に、他の委員の方のアイデアを見て、組み合わせたら面白いだろうと思ったアイデアと合体させました。アイデアのきっかけとしては、0～3歳の保育園や幼稚園に行っていないような母子を対象に、農業を実施して楽しんだという経験があります。次々と色々な方が来られて、赤ちゃん背負っておんぶしたりとか、よちよち歩きの子とか、土遊びをしながら農業をしてるんですけど、参加者にアンケートを取ってみても、良かったという点が見えて来て、特に都会から引っ越してきたお母さんはジャガイモの葉っぱが生えて来て、ジャガイモの葉っぱだと見てわかる人がほとんどいない中から、今はジャガイモの芽がどういふふうに出て来てこういうふうになったら出てくるというが分かるようになったんです。子どもも大人もなんですが、特に大人は、3歳ぐらいのお母さんの野菜に対する認識が変化すると、子どもの食卓も変わったりするんですね。

資料2の2枚目では、私の活動の中で、高齢者と子育てママの交流をしてよかったということをまとめました。具体的にはしっぽくうどんを作りまして、先ほどのアグリームの話に近いのですが、その時もグループごとに違うレシピで作って、それぞれのしっぽくうどんに特色があったので、そのことがすごく面白かったです。それと子育て中のお母さんは孤独な人が多く、高齢者も孤独な人が多いので、普段、あんまり人とのつながりがない、話す機会が少ない人たちが、一緒に何かをすることというのは、出会ったときの感動がすごく、その絆とかつながりというものが、すごく出たというようなことが参考になると思い、資料も用意

させていただきました。子育て家庭と高齢者と一緒に農業をできたらいいなと思っています。ただ、農業体験の中で心配される点として熱中症だとかがあるので、畑の持ち主に協力してもらいながらなんとかやってきたんですけど、もっと手伝ってくれる方がいないかなって思い、高齢者とか時間とか力があって、一緒にしてくれる人が、もっとたくさんいたら良いんじゃないかと思いました。先ほどのアイデアに関連しても、流通業者でも加工業者でも指導してもらえたら、楽しいんじゃないかと思いました。あと、お花畑というのもすごく良いなと思っていて、創造都市っていうとみんなに高松に来てもらいたいっていうところがあると思うんですけど、子供と高齢者がお花畑で、平日とかにイベントでチューリップの球根を植えとくと、春になったらいっぱいの方が香南アグリームに「upTAKAMATSU」しに来るとかっていうイメージでもいいと思います。食べるものを作るんだったら実際、きゅうりとかトマトとかを収穫して食べるのもいいし、私たちは小規模でしかやれてないんですけど、それでもすごく効果が高く、市の力をお借りしたら、もっと多くの人に来てくれるかもしれないし、いろんな場所でするのもありだし、「人のつながり×農業」というのが出来たらと思っています。

#### 【会長】

ありがとうございます。高松ってお花のまちだと勝手に思っていて、ダジャレなんですけど市外局番の「087」って「お花」なんです。そういうところって、広がるし生かしていった方がいいと思うんですよ。実際にお花があるし、育てやすい環境やし、それを一つキーワードにしながら子どもと一緒にっていう立て付けも聞いていて面白いなと思いました。

#### 【農林水産課職員】

高松のお花の消費量って、全国トップレベルというのは御存知でしょうか。お墓さんの文化がまだ残っているのが大きいようです。

#### 【委員】

香南アグリームに行ったことがあるんですが、平日は割と閑散としているときもあるので、平日あたりで居場所がない人にとっての居場所の一環になったらいいなと思っています。乳幼児を連れて作業をするために、1・2時間託児を付けるというところに予算が結構かかりまして、ボランティアの託児の人でも、母子それぞれ11名で、2時間を2回して約4万5千円かかりました。もし、香南アグリームに個室があればそこで託児をして、土日になったらイベントをして、平

日は作業をするというのはどうかなと思っています。

【会長】

今度、仏生山に新しくセンターができるんですが、調理ができる施設もできるので、先ほどのアイデアも実施場所としてはいいのではないのでしょうか。

【委員】

仏生山もいいと思うのですが、農園というイメージが頭にあるので、香南アグリームなんかは、お話をお伺いしていてすごく良いなと思いました。街中ではないので開放的で、雰囲気はいいなと思っています。

【会長】

それはいいと思います。子どもがいるのでなおさら、リアルに近い場所がいいと思います。

【委員】

市としては、香南アグリームをもっと利用してもらえればいいなおっしゃっていましたが、指定管理以外に何か取組をされていたりするのでしょうか。

【会長】

たかまつミライエでは、施設によっては、市の事業だと会議室を無料で使えたりするんですが、香南アグリームはガチガチの指定管理なんですか。

【農林水産課職員】

そうですね。

【委員】

話は変わるんですけども、先ほどの補助金で1団体1回というお話があったんですが、それを1団体でも複数回利用できるような補助金の在り方に変えるというような提案はできないのでしょうか。

【会長】

それは制度上難しいのではないのでしょうか。今考えているのは、例えば、ぬくぬくママSUN'Sでやって upTAKAMATSU が協力する形。また、JCでやるのか。主催を変えるのはどうでしょうか。

【委員】

そこはダメにならない形で行う必要がありますね。生涯学習課はどんな参画できる形のイメージをお持ちなんですか。

【生涯学習課職員】

私どもでは、「子どもを中心にした地域交流事業」という地域で実行委員会を作っていて、そこに補助金を交付しているという事業をしています。その中で、実際に農業体験をしている地域もありまして、この事業に絡められるかと思ひまして、参画希望ありということでお答えさせていただきました。地域で子どもを育てていきたいと思いますという目的のため、こども、保護者、地域の大人で交流をしてもらって、そこに補助金を出すという交流事業をしています。

地域単位で考えているので、円座なら円座で、例えば、老人会と子育て団体の方とPTAの方とかで実行委員会を作っていて、そこで事業をします。そこで農作業をすとか、花づくりをすとかに支援をすることは可能かと思ひます。

【委員】

つまり、どこと組むのかという話になるわけですね。そして、組んだ先の老人会の方や、農家の方と事業を行うことになるわけですね。

【生涯学習課職員】

基本的にはやはり、地域での関係づくりにつなげてもらう必要があるので、この提案の場合は、そこのお年寄りが中心になると思ひます。その地域の子どもも呼ぶ必要があります。

【事務局】

地域の子どもも呼ぶ必要があるわけですね。

【委員】

老人会はマストで必要なのでしょうか。

【生涯学習課職員】

老人会がいなければいけないというわけではなく、事業毎に実行委員会の形は変わってきます。

【委員】

言ってしまうと、農業でなくてもいいわけですね。

【会長】

規模としてはどれぐらいなのでしょう。

【生涯学習課職員】

初年度は10万円で、3年間ありまして、2年目・3年目は8万円になります。

【委員】

同一事業の継続で3年間使えるというわけですね。

【生涯学習課職員】

そうです。ただ、既に取り組を実施した地域については使えないので、取り組をしていない地域ということも必要になります。

【委員】

ある地域で実施したのと別の地域で実施していただくということは可能でしょうか。

【生涯学習課職員】

実施には、それぞれの地域で実行委員会を作っていただく必要があると思います。

【委員】

開催ノウハウは私が持っているのですが、その地域の人が主となって立ち上げる必要があるのは難しいところですね。

【委員】

おそらく組む先によるのではないのでしょうか。一緒に取り組む人がその地元の人と組めるかどうかだと思います。

【生涯学習課職員】

そうです。基本的には、その地域での活動になるので、農家の人もその地元の人で探してもらおうようになります。

【農林水産課職員】

老人会の中でも田んぼを持っている人がいると思いますので、仲間に入れたら体験はできたりとか、小さな田んぼを貸してくれたりとかはできると思います。

【委員】

この補助金と、先ほどの農林水産課の補助金とを併せて受けとることはできるんでしょうか。

【農林水産課職員】

例えば、第一部で農業体験・第二部で交流事業のように実施を分ける形であるのなら、大丈夫のような気がします。

【委員】

内容としては、「交流」と「調理」なんで良いんですが、地域と絡むのが難しい。

【副会長】

質問なんですけど、いろいろな地域でやると、お金の面や人の力も必要で、例えば、モデルを作って高松の創造都市のモデルにしませんかというビジョンなのか、一時的なものだけなんですか。upTAKAMATSU でやるという理由がつけられれば、自分の団体だけでやるという話にもならないと思います。

【委員】

他の委員のアイデアを見ながら固めたら、今のアイデアの形になりました。創造都市のイメージとしては、さっきのお花畑の話みたいな見た目は派手というイメージがあります。私としては、元気な高齢者がどんどん増えているので、高齢者の力を使うことは色んなことでいいことだと思うので、高齢者にスポットを当てたいし、育休制度がそれなりに充実してきて、ひと昔前より長い期間をとれるようになったけれども孤独だったりするわけです。地域で子どもたちを見ていく、子どもは子ども施設、高齢者は高齢者施設ではなくて、交流していくことで高松が元気になっていくことに結びつくと思っています。

【会長】

副会長の意図としては、継続性とかゴールをどこにしているのかということだと思う。今年はやったけど来年はできないということになったら、それは根付かないです。解決したい問題を継続してできるのかということをやするためにやると

というのは、トライアンドエラーで創造都市っぽいと思います。ゴールは設定するけども、やってみて上手くいかないこともあるし、今年度はやってみるけど来年度の向けてこういうことを一緒に考えてくれないかということはずごくU40っぽいと思います。

少なくともやろうとしていることに、食いついてくださっているということは、何か動いてきているんですよ。その問題意識が一緒であるということは間違いありません。

#### 【委員】

経済的な感じで考えることはすごく苦手なので、感情的な感じで考えるのはすごく得意なんです。市の事業も地域の交流なんですけど、そういう人がいるということに気づいていない人が、気付くことになったというそれこそが効果だと思っています。しっぽくうどんの次では、「あるもの探し」というものをやりました。例えば、私には田んぼがあるけども元気がないとか、子どもの面倒見ていて時間がないけど料理が得意みたいな、自分のあるものとないものをワークショップで探したんですけども、それを鳥の子紙にまとめたときに、この人は子どもの面倒を見てもらったら料理教室を開くことができるとか、夢のプランがいっぱい出て来たんです。そういうお金がないので実現しにくいところを、市の力を借りて何かしらできないかということなんです。

#### 【会長】

今おっしゃられたことは、シェアリングエコノミーそのものですね。持っているものと持っていないものを共有して経済を回そうとする考え方ですね。

#### 【委員】

だから市としても得なはずなんです。そこで持っているものと持っていないものが合わさって、勝手に人々が地域づくりをしてくれるようになるってこの助走部分をうまく回っていけば、人々の気付きが生まれてくると思うんです。

#### 【農林水産課職員】

「子育てしやすい高松」というのが大きなゴールで、その中に、幼稚園や保育園の前の0～3歳児の子育てで、地域で子育てサークルがいろいろなところで独自の活動をしているイメージを持って事業を考えるとよいと思います。

【委員】

大事なものは、高齢者が子供を見て喜ぶということは、もちろん良いことなんです。お母さんと高齢者が交流するということです。お母さんはどういうふう子育てをしているのか、どういうふうなことが無くて困っているのか、高齢者はどういう暮らしでこういうのがあったらいいのに無いものなどを、お互いに知ることがすごく大事です。色々な交流事業があるけども、その人がどういう人なのかということをお互いに知り合う機会を作ることが、大事だと私は思います。そしたら次につながるし、そういうつながりを作りたいと考えているんですが、夢の話で終わってしまいます。

【会長】

それを今回、食とか農業とか絡めてアイデアにされているわけですが、地域の交流というよりは、ごじまん品の補助金で何かできそうですか。

【委員】

ごじまん品は、何かしらはできそうです。地域の交流はハードルが高そうですね。

【農林水産課職員】

要するに、保育所などへは補助はあるけども、サークルは独自で運営されている、そこをもうちょっと市として何とかするような制度が出来ることがゴールととらえるということでしょうか。

【副会長】

目指すはこの制度の実現で、創造都市を進める一手になるということですね。その辺の第一歩の小さなモデルを実現してみますという話ですかね。

【市役所U40】

3年で手が離れる仕組みを作るのも一つではないでしょうか。ノウハウとかはがつつり関わっていただいて、3年目にはその地域の人でやっていけるようになるような形も一つだと思います。ずっと地域に入るのは大変でしょうし、地域も限られると思うので。

【委員】

子育てサークルでも潰れているところがいっぱいありますよね。

【市役所U40】

人がいなくなっても、補助金がなくなっても、事業がなくならないような仕組みが出来たら、地域でやる意味があると思います。

【会長】

一旦、「やりたいこと」と「出来ること」をさび分けして、そこから「できそうなこと」は何なのかを整理していただいて、一度、先ほどの提案者と相談していただきたいです。現状としては、こちら側から「こういうことをやりたいので一緒にお願いできますか」という投げかけをしないと次に動けないので、今回は予算規模が足りないから無理とか、地域性がクリアできそうにないので厳しいといったことが出てくると思います。

【委員】

これに当てはまっていないと出来ないということによろしいでしょうか。

【会長】

今はそうです。関係課から出てきている素材は、そこなので、そこに寄せられるものは寄せていって、できそうならお金もつくるのでやった方がいいです。

【農林水産課職員】

一つ、モデル地区を作ってみるということも一つです。我々としてもモデル事業という名前を付けることはあるんですけども、一つ上手くいったら横展開も生まれてきます。コミュニティなんかにも子ども農園を一つ作ってもらって、そこに来れる人はいつでも来てもいいですよと、特に周りの高齢者も来てくださいと呼びかけます。つまり、別に制約もなく自由参加で来れる人がくる形です。そこに子どもたちやお母さんも連れて来るような、モデル農園のようなものが出来れば次に進んでいくことができると思います。

【会長】

一応、会長としてイメージするものは、それぞれの部局で違う事業だけれどもU40がこうやって関わることで、横串が入って、一つのモデルで地域でこういうことができるということ、市長が来られたときなんかそれを発表したらみんなにとって良いことになります。極端な話をすると、農業の補助金は去年1件しかないのに、でもそれを違うところで組み合わせてモデル事業化して、それだったら各地域や、コミュニティセンターでやったらどうかという流れになれば、

良い動きになってくると思います。提案者が思い描いているようなゴールの世界観を目指しつつ、かつ、皆でやりたいと思えたら、やったらいいと思います。

それでは、次のアイデアに進みます。

【委員】

ほとんど同じような感じなんですけど、資料3の御回答としては、郷土料理を作る交流イベントに栄養士さんに入っただけということですが、協働企画提案事業の時もお話させていただいたんですが、高齢者と子育て世帯が交流してしっぽくうどんを作ったことがあります。グループごとで違うレシピを作ったので、それぞれの個性が出ていました。グローバルワークショップというのは、外国の人との交流ということで、アイパル香川とかと連携することでいろんな方に郷土料理を知ってもらうことができます。そこに保健センターさんも入っただけなら、栄養面も外国の方から多世代の方に支援ができるかなと思いました。料理をするということで、小さな子のお母さんには、託児もつけたら交流も深まるなと思い、託児を付けたら約4万5千円の経費が掛かったりしました。

【保健センター職員】

外国の方を含めた子育てワークショップというのがメインにあって、ワークショップの一つに郷土料理を広めていこうということが、入っているということで、我々保健センターとしては食育の推進を所管していますので、その視点で何らかの形で、関われる余地があるのかなと思い、参画希望ありと回答させていただきました。一つお聞きしたいのが、「食の制限を考えながら」とあると思うのですが、これはどのような趣旨になりますか。

【委員】

宗教などの関係で食べられないものがあるところを、アイデアで出されていた委員がいらっしまったので、例えば「イスラム教の方が食べられるしっぽくうどん」について考えながら作るのも楽しいと思ったからです。

【会長】

保健センターとしては、例えば、外国籍の方に向けて何かやられているんですか。

【保健センター職員】

特別、外国籍の方だけをターゲットにしたというものはないですが、一般の人

が受ける健診だとか教室だとかには、極力、国籍問わず参加していただけるように、一定の配慮はしております。

【会長】

言語対応は、どうされていますか。

【保健センター職員】

基本的に、多国語に対応している職員がいるというわけではありません。完全にコミュニケーションが取れる状況かといえそうではない状況ですが、母子健康手帳でいうと多言語に対応したのがあります。

【会長】

今、アイデアをお聞きいただいて、取り組みやすそうなイメージは持たれましたか。

【保健センター職員】

今、「食の制限」ということを聞かせていただいたのも、どんな制限かによっては、栄養士の観点から助言できたらいいかと思ったんですが。

【会長】

例えば、アレルギーだと守備範囲に入ってくるわけですね。仮に、卵アレルギーの方のために、「卵を使わない何か」ということを企画したときに、栄養士さんに御協力いただいて、こういう食材使ったら代替になるとかいったことはしやすいのですか。

【保健センター職員】

そうですね。アレルギーとなったら除去か代替かというところになってくるので、この食品ならこれで代替ができるということは助言できると思います。宗教関係の食材の話は確か、肥料から色々と気にされるという話は耳にしたことがあります。

【副会長】

私のところでは対応していませんけども、ムスリムの方は豚肉とお酒は御法度ですね。豚肉は色々な化学調味料にも使われていたりします。厳格な方は、しょうゆの製造工程でお酒が発生するので、それもダメという方もいらっしゃいます。ただ、私も勉強したときに、観光の観点なんですけど、飲食店の方がそうい

った方を受け入れる時にどうしたらいいんですかといったときに、どういったものが入っているのかを開示して選んでいただいたらいいということでした。製造工程でお酒が発生しない「ムスリム醤油」というものを製造されている方もいらっしゃいます。

【農林水産課職員】

「ハラール」にも厳密にいうと、牛肉も鶏肉もお祈りをささげてからと殺されたものでないと、食べてはいけないという考えもあったりします。

【委員】

副会長がおっしゃられたように、宗派によって、自分たちがどの程度守ろうとしているかが変わるので、開示して選んでもらうというやり方しかできません。

【会長】

とすると、もうちょっとこちらでこういう事業をするという形が出来てきたときに、御協力していただけますかという問いかけをさせていただくという形でもいいでしょうか。

【保健センター職員】

そうですね。我々としても、もうちょっと具体性があれば、考えやすいと思います。

【副会長】

アレルギー以外は何がありますか。

【保健センター職員】

御提案を拝見した限りでは、郷土料理を作ろうというワークショップを作ろうとなったときに、制限を取り入れながらレシピを考えるときに、栄養士の知識で助言ができるかなというところが始まりです。

【会長】

例えば、栄養士さんが考えたレシピを提供いただくことは可能なんですか。

【保健センター職員】

一般的なレシピに、栄養学の観点を加えて、バランスを良くするための助言はできます。

【委員】

世界の郷土料理も考えています。

【農林水産課職員】

アプローチ的には、創造都市・高松なので、高松のものをどう発信していくのかというのが大事ななと思いました。まずは高松の文化を、我々、市民がしっかり理解して、それをどう発信するのかということが創造都市・高松の第一歩なのかと思っています。天ぷらなんかは、高松は全国で消費量が二番目だったりします。練り物なんか地域性が出たりします。

【会長】

郷土とか世界の料理っていうのを、仮に定義してはどうでしょうか。例えば、高松空港から行ける海外に限定して、その世界観の中に限定して料理を探求してみようとか。例えば、台湾のとある地域の料理をやるんだけど、栄養士さんの栄養学の観点から見てもらって、さらに高松のごじまん品も乗っかってやるってなると、U40チックになると思います。そういうストーリーは大事だと思います。

【副会長】

逆もあると思っていて、今、香川県にどういう外国人が住んでいるかというところ、ネパール人が多いということが特徴的で、そういうことを受け入れるまちという観点も創造都市だと思うんです。

【会長】

世界の料理や高松の料理を具体的なものにまで落とし込んでから相談するとかでないと、現状では、市側としても関わり方が難しくなっている。

【農林水産課職員】

郷土料理って面白くて、葉ゴボウもペペロンチーノに入れたりすると美味しかったりするんです。なので外国の料理と組み合わせたりすることで、新たなステージに行ったりするので、その辺りは自由ですね。

【委員】

葉ゴボウのサンドイッチなんかもテレビでやってましたね。

【農林水産課職員】

郷土料理もいろいろとアレンジができますし、また、我々としてもその存在を忘れかけているんですよね。海外から来た人から高松の名物を尋ねられて、どこそこの店で食べることができるとまで、情報発信していただいて、その材料は高松ごじまん品ですよとなれば一番ありがたいですね。

【会長】

であれば、これも一回持ち帰っていただいて、再検討の後、市にもう一回投げさせていただいて、御協力いただける範疇があるか御回答いただきたいと思います。それでは、次のアイデアに進みたいと思います。

【委員】

子ども農業アドバイザーはやれたらいいなと思っています。芸術士というのは高松市で行われていて、すごく良い取組だと思っています。保育士さんってあらゆることをしないとイケなくて、農業なんかでいうとどこの保育所でもやっているんですが、保育士の先生もネットで知識を得たりしながらやっていたりするんで、普通の人がやるような内容と変わらなかつたりするんですね。絵とか工作もどこの保育所でもやっているんですが、芸術士さんが来ると誰が見てもアートな世界が繰り広げられるんですね。専門家の力はすごいなと思ひまして、農業に関しても、「子ども農業アドバイザー」というものがあれば良いのではないかと思ひました。先ほどのアイデアにも関係してくるんですけど、地域のシルバー世帯の方にも参加してもらったりしながら、園に張り付きで作物が植えてから育つまでプロデュースしていただくという形です。現状の家庭菜園のような形からもっと本格的な農業の形に近づけて、ごじまん品を扱って皆で食べたり、業者に入っただけでいただくこともありだと思ひます。

【事務局】

地域の活動というよりは、こども園での活動ということでよろしいでしょうか。こども園運営課の事業内容を確認したところ、「特別保育事業」という中で地域活動事業の一環で世代間交流事業というものをやっているそうです。各園が、地域の長寿会であるとか、地域の高齢者施設であるとか、そういう方に保育園に来てもらったり、施設のお誕生日会に参加するとかといった事業をしているとのこと。各園で事業所と調整をし、市に計画を出して、事業をするという

ものです。36園の中で15園がこの制度を使っているようですが、この制度以外でも保育園独自に、農業体験に取り組んでいるということはあるようです。子ども園運営課としては、この事業を活用した形であれば関わりを持つことができるのではないかとのことでした。

【委員】

そのことについては、知っていて、やっぱり園の方が大変じゃないですか。色々工夫をする必要があるわけなので、得意な保育士さんがいればいいですが、そうでないところは負担になっているんですね。芸術士さんだと先生も勉強になるし、子どもたちも才能が伸びます。もし、農業のアドバイザーが来たら、芸術士と同じような驚きがあると思うんです。農家の方でもいいんですけど、責任をもって、その園の季節感のある畑をプロデュースしてくれる方であれば。

【会長】

芸術士というのは、アーキペラゴという団体が、芸術士としての技術や倫理観もしっかり見てから派遣している中で、仮に農業士ができるようになったときに、養成とか、U40がどういうふうに関わるかが重要になると思うんです。農業士になりうるようなモデルの人っているんでしょうか。

【委員】

専門分野も持ちながら全般的にというと結構レベルが高い。農業試験場の人を引っ張ってきてやってもらうとか。

【農林水産課職員】

トークができて、技術があって、継続性があるという人材が求められているんですよ。

【会長】

子どもに分かりやすく話す必要があるわけですね。芸術というのは教育の一環でやりやすいんですが、農業というとそれは農業体験というコマしかできないようなところに落ちる可能性があると思うんですよ。そういうことでいうと、幼稚園のカリキュラムに、ある程度定期的に関わっていけるものをどう作るかっていうイメージでもいいのかなと思います。それにどれぐらいのコストと時間がかかるのかというのが、見える段階までもっていく必要があると思います。

【農林水産課職員】

地元の小学校で子ども農園をやっているんですが、それは地元で凄いい中核となる農家さんがいて、きっちりと子ども農園の面倒を見てくれて、十年ぐらい続いているんです。授業で案山子を作ったりとかもしていて、お金はJAさんが出してきて私も現場で教えたりしています。地域にそういうチームがいて、田んぼのそばに学校があるという条件がそろそろ必要があるので、校区ごとにそういうチームが作れるのかという問題があると思います。

【会長】

一つチームを作って全部やってみたらいい。

【委員】

U40自体がよく分かってなくてすみません。みんながこういうアイデアを出すなら、私はこういうアイデアがあるって書いたんです。

【会長】

先ほども言いましたが、そのアイデアを出したときに、一番アイデアに食いついてもらっているわけなんですよ。食いつかれているということは、地域に根ざしている課題を解決する糸口がありそうだと、関係課が思ってくださっているわけです。その中で今日は全部できなかったとしても、今日お話をさせていただいた中で、少なくとも農林水産課は何かやってくれると思います。

【農林水産課職員】

一つモデルを作ってみて、提案者がやりたいことをこんなふうにやってみて、こんな支援があったらいいというのを言っていたら、先ほどの補助金を組み合わせて実施してみてもいいと思います。その上で、我々がこういう方向に変えたほうがいいよということを次に生かすとか。小学校って学童農園が近くにあるので、そこに農家さんが田植えの時にお願いして途中の管理はお願いしていて、最後に収穫して調理して食べるという一連のサイクルがあったほうが理想だと思います。

【事務局】

イベントとして体験を何回かするのはあると思うんですけど、その間の管理してくれる人というのは一番大事だと思います。そこを見つけないとなかなか難しいと思います。

【会長】

無理をしてはいけないので、まずはU40でどうしたらいいのか相談しながら考えましょう。もし、やるのならセットで、来年度を目指しながら今年度できることがあれば、小さくてもやっていくということは大事なことだと思います。一旦、そういうことでよろしいでしょうか。

— B 班 —

【副会長】

それでは、B班の進行をしていきます。今回は、この進行表に載っているアイデアについて議論していきます。大体、一人当たり割り当てが15分ですが、最初の最大5分で、どういう思いでこのアイデアを起案して、どんなことをしたいのか、どういうことがゴールなのかっていうのを説明していただきます。残りの時間で、関係部局の方から意見を聴きつつディスカッションしつつ、「○・△・×」を判断していただきます。それでは最初の委員からお願いします。

【委員】

私の仕事は、主にYOUTUBEで若者向けの番組を制作していて、やっぱり若者という観点で、香川県の企業について紹介するという取組を御提案させていただいております。もう一つのアプローチとしてブラック企業の特集も提案としてあるのですが、このアイデアはポジティブにニッチ産業とか世界や日本でトップシェアを誇る企業が香川県内に結構あるということ、私自身、香川に帰ってきてそれを知りましたので、それを知る機会を創出していきたいと考えています。私も起業して感じたこととして、県内の認知度って本当に作りづらいと思っています。県内の若い子もベンチャーというか、凄い企業というかやっぱり県外の名だたる企業へ就職していくのですが、やっぱり香川県内にも凄い企業がいっぱいあるので、それをまず知ってもらうことが重要だと思っています。私も香川大学出身で大学生ともよくコミュニケーションをとるのですが、大学生もマイナビやリクナビを利用して年収いくら、転勤先どこ、ソートをかけて当てはまる場所にエントリーシートを20社・40社出したりしているようです。そんなことをするのだったら、より会社のビジョンに共感してより会社の魅力を伝えることで、学生がその会社に就職したいと思ってもらえるような、企業としても学生としてもメリットがある、そういった新しい就活の仕方を創出する機会になればと思っています。意外と県内企業では、そういう企業が少ないのではないのでしょうか。マイナビやリクナビのような東京発のプラットフォームに香川県の企業が勝負しても勝てないと思いますので、そうじゃない何か新しい支援媒体を作ることにもつながると考えられます。

私がお会いした香川県内の企業さんで、靴を全てフルオーダーで作っている会社さんがいます。普段は履かないのですが、友人の結婚式などではフルオーダーの靴を履いたりして、企業はテレビ番組でも紹介されたりしているのですが、そういったことも県内の大学生は知らないんですね。そういったこともしっかり

伝えていければと思って御提案させていただきました。

【副会長】

具体的な成果物のイメージはありますか。

【委員】

実際に取材に行つて、映像なり記事なりに残したりだとか、私の会社も発信力がありますので4月の就活期に特集を組んで情報発信していくことをSNSだとかWebサイトでやっていくことはできます。

【副会長】

どこで発信するかは考えていますか。

【委員】

主なところだと、フェイスブックインスタグラムやツイッターですね。Webが必要なら作成しますが、予算との兼ね合いもあると思いますが。

【副会長】

それではここでいったん区切って、関係課の方からお考えを置き換えいただいてもよろしいでしょうか。

【産業振興課職員】

御提案のアイデアにつきましては、資料3にも記載させていただいたように、高松市内の中小企業者を対象に、福利厚生や社員の能力向上等に取り組んでいる中小企業者を選定しまして、表彰制度を制定することを考えているところです。今の段階では、我々としてどういうふうに表彰企業をPRしていけば良いのかを検討中ですので、参画希望と回答させていただいたところです。

【委員】

色々なところで周知することは、社員の満足度の向上につながっていくと思います。また、社員が活躍する姿にスポットを当てた発信をすることで、その方たちのモチベーションにもつながったりすると思います。

【副会長】

それでは、関係課としては、受賞企業をPRしていくという方向性でよろしいか。

【委員】

選定基準としてその方がやりやすいと思います。

【事務局】

一般的にどの程度の成果物で、どの程度の経費が発生するものなのでしょうか。

【委員】

私の会社でいうと、SNS上での600文字から800文字程度の記事で5万円程度です。弊社のアカウントは大体1万2～3千人のフォロワーがいますので、弊社のアカウントを利用していただくことも、コンテンツだけを提供するということも可能です。

【副会長】

その辺りの市としての制限はあるのでしょうか。

【産業振興課職員】

今年度から実施予定の表彰制度なので、ある程度、表彰企業のストックができてから発信していけたら効果的かとは考えています。

【産業振興課職員】

予定としては今年度の2月頃までに選定して、表彰するところまでを考えていて、PRしていくならその後になると思います。

【委員】

3月・4月は就職活動にとってタイムリーなので、スケジュール的には無理がないかと思います。

【委員】

通常だと、動画を作成しても市の公式アカウントで発信するだけだと、フォロワーの層でその若い世代をカバーしきれていない部分があると思うので、既に若い層をフォロワーに持つ民間のアカウントで受賞企業を発信できるようなやり方があれば、個人的にはすごくあります。

【副会長】

先ほど、価格の提示もあったが、その辺りも踏まえて、「○、△、×」をつけるとしたらどうでしょうか。

【産業振興課職員】

現時点では、PRについては、市のHPやフェイスブックなど経費をかけない方法で考えております。

【委員】

産業振興課職員としての予算は無いかもしれないけど、U40の予算がとれるのであれば、実施は可能なんじゃないでしょうか。

【委員】

今、やりたい気持ちがあるのに、予算の話が出てしまうと、持ち出しになってしまうのかって思ってしまう。

【事務局】

第 1 回の会議でもお話しさせていただきましたが、まずは、御提案のアイデアが市の主催事業の可能性があるのかを関係課に判断していただくようになります。

【副会長】

以上を踏まえて、率直に関係課としての回答をお願いします。

【産業振興課職員】

先ほども申しあげたとおり、現状、予算もない中で、表彰企業のPRについては予算がかからない形で進めていきたいと考えております。

【副会長】

それでは「×」ということで、あとはU40の中で検討したいと思います。それでは次のアイデアに移りたいと思います。

【委員】

まずは私のアイデアに丁寧な回答をしていただき御礼を申しあげます。誤解を恐れず申しあげると、私は観光PRがしたいわけではなく、どちらかという高松に暮らしている子どもたち学生が、高松に対する愛着やシビックプライドというものの醸成が出来たらいいと考えています。そのシビックプライドの醸成につながるのは、観光という点が一番親和性が高いとされていて、自分のまちを案内しようとしたら自分がそのまちを知っていないといけないので、何かしらそういう仕掛けが出来たら楽しいかなと思っています。

【観光交流課職員】

御提案ありがとうございます。まず内容を見させていただいて、すごくいいお話だと思いました。資料3にも記載のとおり、昨年度、ゲストハウスのオーナーや大学生、留学生を交えた座談会を複数回設けまして、外国人観光客の受入改善に向けて色々と議論をしました。その中で年度末に、香川大学、高松大学、徳島文理大学の学生を構成員とした、「お助け隊」というチームを組織し、これからボランティア活動しようとしています。第1回の活動としては、まずは実証的にまちに出てやってみて、本格実施は瀬戸芸の夏会期に向けてできるよう考えています。御提案のアイデアについては、数十年先にはなりますが、将来的な観光業界の担い手の育成につながっていくのではないかと、というところで当課では事業化ができるのではないかと、ということで、希望ありの回答をさせていただきました。費用としてはお助け隊の活動費の中で受け入れするだけなので、そんなに掛からないと考えています。細かい話ですが、小学生を集めるための交通費だとか、保険の関係が想定されますので、当課としては、やはり学校サイドの保険の中で対応してほしいと考えております。当課の意向だけでは決められないので、教育委員会も巻き込んでいく必要があると思います。やはり先生に来ていただく必要があると考えておまして、大学生だけに任せるのは難しいと思っています。教育委員会のある程度の協力があれば実現は可能ですし、それほど費用は発生しないと考えています。

【委員】

今おっしゃられたように、課外授業の一環で中学生や高校生が参加出来たら面白いなと思っています。

【観光交流課職員】

事業化については、「お助け隊」の活動がある程度本格化して、実際に受入れできるほどの体制が整った段階になりますので、早ければ来年度ぐらいでも可能だと思います。

【委員】

ちなみに5月19日の下見活動に私やU40委員が見学させていただくことは可能ですか。

【観光交流課職員】

大丈夫です。一応、大学生を想定していますが、30代まででメンバーを募集していますので、U40委員でしたら入っていただくことも可能です。ユニフォームも作ってあります。

【副会長】

教育委員会の話は、どこが話をするんでしょうか。

【観光交流課職員】

一旦、産業振興課から話していただきたいと思っています。当課が主体的にやるのは構わないんですが、やはり学校サイドとの調整や保険の関係などのバックアップは学校教育課にお願いしたいと思っています。もし、当課がするのであれば学校とは関係なく、夏休み中のお子さんに参加してみませんかと呼びかけてみることにしたいと思います。ちょっとバラつきがあると思います。

【委員】

普段一緒にいる子どもたちが参加する方が、効果が高いと思います。もし、教育委員会の協力が得られなかったとき、募集をかけて行うということは可能ですか。

【委員】

できます。ただ、その際の送迎などは各自でお願いするようにはなると思います。保険の関係は少し調べてみますが、怪我をした時のことを考えると御両親との信頼関係の下で実施する感じになると思います。

【副会長】

あとはやり方だけというかんじでしょうか。課としては「○」ということでしょうか。

【観光交流課職員】

ある程度体制が整ってからにはなりますが、一緒に進めていきたいと考えてい

ます。何かこういったスキームでやりたいというのがあれば、またお知らせください。

【副会長】

ありがとうございました。それでは、次のアイデアに進みたいと思います。

【委員】

今回、2つのアイデア御提案しているのですが、この2つに共通するのは、市民ベースに落とすというところですね。市民の関わりを持たせるというところが、大きなところなんです。16番のアイデアについては、昨年度「第29回日本パラ陸上競技選手権大会」を実施して、今後も障がい者スポーツを推進していくと思うのですが、台湾の選手が来ることも決まっています、共生社会ホストタウンにも指定されています。その辺りで今回のパラがすごく盛り上がったこともあるんですけど、共生社会ホストタウンのところって全然知られていないです。すごくもったいないので、ここの部分をもうちょっとハード面ですること限られてるんですけど、市民ベースで落とし込んでいくというところが16番のアイデアです。じゃあどういふふうに市民ベースに落とし込んでいくのかというところなんですけど、前回スポーツ振興課さんが小学校を回られたりとか、そこは続けてやられると思うんですけど、課が3つに分かれているというところがあるので、まずは情報をまとめるというところなんです。私の調べでは、パラカヌーとパラフェンシングの選手がいいところを狙っているようなので、その要素があるといいと思います。去年の私のボランティアプログラムに参加していただいている方は知っていると思うんですけど、最終回はパラのアスリートの方に来ていただいて、パラ競技の見方をレクチャーしていただいて、めちゃくちゃ評判良かったんです。だから、そういうところでやってもらうような情報を集めていくというところと、何してるのか、どういうところをPRしてるのかっていうパラリポーターみたいなところで入って行って、情報を一つにまとめて強くして発信していくというところに関われるような、市民ベースのイベントとして落としていきたいです。既存のイベントの一緒に乗っていくっていうのはそうなんですけど、そこが一番できればいいかなと思っていますところなんです。

あと、政策課の方にお聞きしたいのですが、政策課としてどういうふうに動いていますか。

【政策課ユニバーサルデザイン推進室職員】

ユニバーサルデザイン推進室では、共生社会ホストタウン登録前からユニバーサルデザインのまちづくりに取り組んでいるのですが、共生社会ホストタウン登録を契機に、より取組を強化していきたいと考えています。

昨年度は、子どもたち向けのユニバーサルデザインの啓発動画を作ったり、「たかまつユニバーサルデザインマップ」というWebサイトを構築し、公開したところです。

今年度は、それらを活用していくとともに、子どもたち向けの啓発パンフレットを改訂するなど、共生社会ホストタウンの機運を生かしながらユニバーサルデザインのまちづくりの機運の醸成につなげていきたいと考えています。

【副会長】

関係課の方は、判断のために他に聞いておきたいことがあれば、質問していただいて、実現可能性、特に予算面を考慮していただきながら意見交換をしていただきたいと思います。

【スポーツ振興課職員】

おっしゃっていただいた昨年度の日本パラ陸上でも小学生との交流事業なんか、当日の動員につながったという良い経験ができたと思っています。御提案のとおり市民レベルに落としていくということが課題だと感じていて、当課で考えているのは、今年も大会を開催したときに、関連イベントであったり、交流事業とか、スポーツ体験を実施するという事は継続していきたいところはあります。もっと広く市民レベルで落としていくということは、大きな課題なので、何をしていくべきかは、検討しているところです。予算面では、昨年度と同じような交流事業も実施予定ですし、パラアスリートを招いての教室も予定しています。それをたくさんの人に来てもらえるように仕掛けていくことが大事だと考えています。

【委員】

基本的にここから何か、私たちがゼロイチから何かを起こすということは難しいので、3課の中で色々とお考えがあると思うのですが、前回のマップなんかはそのイベントに乗った形で特異さを出していったところなので、ポイントポイントのところでやっていきたいことと、市民レベルで落としていくということとコミュニケーションのきっかけを作っていくというのは、私とU40のメンバーでやっていくのは凄く得意なので、その「モノは作ったよでもそこが進まない」というところの加速度というところはサポートできると思います。

【スポーツ振興課職員】

実施が2020年になりますが、パラカヌーの方の話があったと思うんですが、どういう競技でどういうことをするのかっていう選手の紹介っていうのは、東京オリパラまでにしておかないと間に合わないかと思っていて、当課では聖火リレーの前に関連イベントをしようと思っていて、そこで選手の紹介情報を取りまとめていただいて、何かパネルに落とすとか、展示するとかクイズ形式で子どもたちでやるとかそういうのは、そんなに費用も掛からないので実施可能だと思います。

【委員】

そういうモノがあって加速するのが、お互いメリットがあると思います。手が届かないところがあると思うので。

【スポーツ振興課職員】

台湾との共生社会ホストタウンのお話もあったと思うんですけど、今回の中国・四国パラの時も台湾のパラの方に来ていただいて、一緒に小学校回ってもらったりとか、2階のペDESTリアンデッキのところで「共生社会ホストタウンとは」のパネルの作成をお願いしてたりだとか、そのあたりも2020年の関連

事業に合わせて実施できると思っています。

【副会長】

提案者としては、まずはこれから市がやりたいことは具体的に何なのかを知ってそこに当てて提案していきたいという感じでしょうか。

【委員】

その方が、お互いにとってすごく良くて、私とスポーツ振興課とは一度組んだことがあるので、どういうふうに動いた方がいいのかとかどういうふうなところが足りないのか、できるできないは置いておいて役割分担はしていくっていうのがお互いにとってメリットがあると思っていますので、ちゃんとお互いのゴールと成果を一緒に標準が合わせられると一番だと思います。

【副会長】

スポーツ振興課の方では、この状況で一緒に取り組んでいくことができそうでしょうか。

【スポーツ振興課職員】

関連イベントの時に、集まった人たちに対してそういうのを展示するとかクイズ形式でするとかそういうのは問題ないということでもよろしいでしょうか。おそらく費用もそんなに掛からないと思うので、予算計上の時期に合わせて予算的なものを上げていただいたらこちらで予算計上できると思います。

【副会長】

そういう関わり方でよろしいでしょうか。

【委員】

そういう関わり方の方が加速できたり、バックアップできると思います。特にU40として主役を張りたいたいわけでもないのですが、前回でお互いの役割が見えてきたものがあるので、今回どういうふうに動かして行くのかということと、ボランティア講座の時には障がい福祉課には御世話になりました。良い形で最大の結果を出せばいいと思っています。

【副会長】

予算面も含めた実現可能性を判断していただきたいのですが、「○」ということでよろしいでしょうか。

【スポーツ振興課職員】

ぜひ取り組んでいきたいと考えています。

【事務局】

政策課と障がい福祉課としては、東京オリパラに向けて何か取組を考えていますか。主に、スポーツ振興課と協議を継続するということがよろしいでしょうか。

【スポーツ振興課職員】

先ほども申しあげましたが、3課が連携して取り組んでいく必要があります。スポーツの部分もあれば、政策的なまちづくりの部分もあります。

【スポーツ振興課職員】

2020年での中四国パラの日程が、東京オリパラがあるので分からない部分があるんですけど、もし例年通りだとすれば、そこでも同じことができると思う。

【障がい福祉課職員】

話はそれなんですけど、関連大会として「ボッチャ大会」というのをやっています。課題として、若い世代の方の参加が少ないということが委託先から声があります。基本的な参加者は、障がいのある方や介助者というところはあるのですが、やはり新しい人の参加が少ないということで、間口を広げながら取り組んでいきたいと思っています。

【スポーツ振興課職員】

やはりパラスポーツを障がい者の方だけがやるのではなくて、健常者も一緒に参加していただきたいところなので、そういうところが御提案の「パラスポーツのメッカ」というところだと思います。やはりスポーツは楽しいものなので、一緒になって楽しむという流れを作りだしていきたいと思っています。

【政策課ユニバーサルデザイン推進室職員】

ユニバーサルデザイン推進室としては、ユニバーサルデザインのまちづくりを推進する中で、スポーツ振興課の取組と連携・協力していきたい。

【副会長】

実際取組については、しかるべき形で進めていただければと思います。それではこのアイデアは「○」として、続いてのアイデアに進んでいきます。

【委員】

「CAN MAP」をバージョンアップしたいと考えています。マップを作るに当たって、前は紙媒体だったんですけど、バージョンアップするには情報を一つにまとめないとしんどいかなと思っています。この情報って、U40の皆で取りに行って、日本パラの周知にもなって良かったんです。それから言うと、まちの人全体に参加してもらいたいぐらいなんですけど、結論から言うと、この「B-MAP」を使うと予算がかかってくるんですね。ミライロという企業と日本財団と一緒に作っているのが、「B-MAP」というもので、こういうふうに情報を投稿していくんです。「CAN MAP」もグーグルマップで更新していけるんですけど、やっぱり細かいところは書いてあげられないので、既にあるシステムに乗せるのが大事かなと思いました。ここがやっている「ブレーメン隊」というミライロのスタッフさんに来ていただいて、「こういうふうにまちを見ます」という説明をしていただいたりとか、障がいを持った方が来た時のケアの仕

方なんかのプログラムもあります。こういったプログラムの入った一つのパッケージがあるので、こういう使い方もあって、どんどん更新して行って、地図が一つにまとまっているというのが良いかなと思い提案しました。

【副会長】

経費はどれぐらいかかりそうですか。

【委員】

20万円程度です。

【スポーツ振興課職員】

内容からイベントではなくて、マップの作成ということでしょうか。

【委員】

イベントをしながらマップを作成していく感じですか。イベントをすることで皆がお店に行って、調べて、情報を入れていくというものです。広く告知して、一般市民が参加するようにして、一緒に地図を作っていきます。

【副会長】

20万の内容を教えてくださいませんか。

【委員】

講師の方に来ていただいて、プログラムや研修の説明をしてくれますか。

【副会長】

それでは、実施費用は別にかかるのでしょうか。

【委員】

受付あたりの費用はかかると思われますか。

【スポーツ振興課職員】

おっしゃられた内容では、スポーツ振興課というよりもユニバーサルデザイン推進室の内容になると思われます。

【事務局】

資料3のとおり、ユニバーサルデザイン推進室としては、「参画希望なし」なので、スポーツ振興課として実施が難しいようでしたら、アイデアの結論としては「×」になると思われます。

【委員】

今の状態では、「ユニバーサルデザイン」の色が強いので、例えば、これに中四国パラの要素が出てくると、スポーツ振興課にとって関係を持てるようになるわけですね。

【副会長】

それではここでは「×」ということで、また、別のところで検討するというようにします。それでは次のアイデアに進みます。

【委員】

会長には申しあげたのですが、今、御提案させていただいているアイデアは、事業としてはあまり構築できていないものなので、最後に1つ追加してお話しさせていただきたいと思います。まず「ソーシャルインクルージョン」について御説明すると、厚生労働省の定義では、「すべての人々を孤独や孤立、排除や摩擦から援護し、健康で文化的な生活の実現につなげるよう、社会の構成員として包み支えあう」ものとされています。題目に込めた意味としては、多様化する社会において、文化施設が求められる新たな役割について、もう一度、考え直したいということがありました。歴史資料や美術品などの収集など大事なミッションもあるのですが、もう少し今の社会活動にリンクさせて活動をすることで、文化施設の必要性に気づいてもらえるようなアクションを起こしたいと思っています。そして、追加させていただきたい事項として、他所の文化施設の事例をみんなで勉強するような勉強会を実施してはどうかと考えています。私の知る限り、県内ではこういった内容の教育普及をしている専門家がいません。私も過去に高松市の施設に在籍していたのですが、高松市の施設ではこういった施設の研修制度がないので、文化庁などの活動にも参加できていないと思います。研修ということで、同じ問題を職員間で共有でき、他館との交流も生まれます。まずは勉強会という機会を持ってみてはどうかという提案になります。

【文化財課職員】

実際に御提案をいただいて、まず「ソーシャルインクルージョン」という言葉が、今、おっしゃっていただいたような内容であること確認いたしました。先ほどおっしゃられたように、美術館も博物館も一緒ですが、利用者の裾野を広げたり、誰にでも来ていただけるように敷居を低くするということは、日々、求められていることでもあります。通常の展示の手法では、文化的楽しみを享受できないような人たち、例えば、視覚障がい者の方に対しては、作者の了解を得て、実際に作品に触れていただくといった展示は、美術館でも過去に実施したことはございます。歴史資料館におきましても、民具などに実際に触れていただくような展示という手法は、積極的に取り組んでいく必要があると認識しております。ですので、そういった事例研究や勉強会といった取組は、有効であると思います。おっしゃられたような教育プログラムに対応できているのは、都道府県立の施設のような大きな施設が多いかと思います。

【副会長】

実際に、このような勉強会を市の事業として実施することは可能ですか。

【文化財課職員】

もう少し具体的に、勉強会のイメージを聞かせていただいてもよろしいでしょうか。

【委員】

先日、ミュージアムエデュケーション研究会に行ってきました。まさに、ソーシャルインクルージョンのテーマについて聞いてきました。題目としては、マイノリティへの配慮ということで、例えば、視覚障がい者の方のために行った取組でもそれ以外の人のためにもなっているという気付きを実際に取り組まれていた施設の学芸員が報告されていました。あと、大阪の大東市というところの資料館では、「進化形アーカイブと旅するミュージアム事業」を実施したことがあり、義手などを製作している会社と連携して、博物館と共同してマップを作成したことなどを実践した学芸員さんの発表もありました。本で読むこともいいと思うのですが、実際に皆で聞いて共有することで、博物館事業で役に立つことも出てくると思います。

【文化財課職員】

歴史資料館業務係全体での職員合同研修というものは、年に数回実施しております。そういったところに外部の専門家に来ていただくということは、職員のスキルアップにも有効だと思われれます。今後の色々な展示づくりにも役に立つと思われれます。具体的に市の色々なところと連携してやりましようとなると、予算の面でハードルが出てきます。人事課の研修制度であったり、非常勤職員組合等の研修助成制度といったものを利用しながら、数万円程度の規模であれば、実現不可能ではないと思います。

【副会長】

具体的に想定されている講師の方はいらっしゃいますか。

【委員】

私が実際にお聞きした講師の方は、東京と関西にいらっしゃいます。

【文化財課職員】

交通費を含めると、一回あたり十万円前後といったところでしょうか。会場は、歴史資料館や美術館での開催になると思いますので、経費は考えなくていいと思います。

【副会長】

そのぐらいの予算感で、実現は可能でしょうか。

【文化財課職員】

もちろん歴史資料館単独ではなく、菊池寛記念館や美術館等と予算を持ち寄りながら実施すれば不可能ではないと思われれます。

【事務局】

本日、美術館については、業務多忙ということで出席がかなわず申し訳ございません。御提案に対する美術館の回答としては、資料3のとおり、こどもアートスペースや出前講座といった既存の枠組みの中で対応させていただきたいとのことでした。今回、新たに勉強会の開催という御提案をいただきましたので、一

度、美術館に確認させていただきたいです。

【文化財課職員】

美術館では、美術館の主体的な事業とは別に、美術館のボランティアさんがいて、20数人、結構活発に活動されていて、ボランティアさんの研修会も実施しています。自主的に、積極的に動いていて、県のミュージアムのボランティアの方と意見交換会をやったりしているので、そういったものも取り込んで、ソーシャルインクルージョンをテーマに実施することも可能だと思います。

【文化財課職員】

結論付けにつきましては、今、予算化の話も出ましたので、先ほども申しあげました、人事課の研修制度等の利用も視野に含めながら、どういう予算の見積が必要なのかといったことを検討する必要があると思います。

【副会長】

それでは、「△」ということで、一度、持ち帰っていただき御回答くださいますようお願いいたします。

【市役所U40】

素朴な疑問なんですけど、この事業をするのならば、U40のメンバーはどんな関わり方になるのでしょうか。単純にお話だけ聞いていると、単に歴史資料館などで研修をしたら良いだけで、U40としての関わりがないのではないのでしょうか。

【事務局】

提案者としては、この研修会という事業に積極的に関わっていきたいという意向はあるのでしょうか。

【文化財課職員】

当課としては、企画立案というところで積極的に関わっていただければと考えています。

【委員】

私としては、研修会に前向きに動いていただけるのであれば、私自身関わらせていただきたいと思います。当日の司会進行などといったことも、もし、御役目があるのであれば検討させていただければと思います。

【文化財課職員】

研修会の内容については、もう少し話し合いをさせていただいてより質の大会ものにしていきたいと考えています。

【文化財課職員】

市の博物館や美術館の職員向けの研修ということでよろしいでしょうか。

【委員】

そのつもりです。まずは、専門職同士で意見を交わした方がいいと考えています。そしてそこで学んだことを市民の方へ還元していくというつなげ方がいいと思います。

【事務局】

研修の内容もまだ固まっていない段階なので、U40としての関わりもそれに併せて決まってくるものだと思います。

【副会長】

そのほかよろしいでしょうか。それでは、このアイデアについては、一旦、持ち帰っていただくということで、次のアイデアに進みたいと思います。少し説明が不足していたのですが、関わり方については、提案者によっても温度差があると思います。提案だけして後はお願いますという方もいれば、自分がぐいぐいやっていきたいという方もいらっしゃると思うので、その辺りは、追々、固めていく感じになっています。

【委員】

今回、御提案させていただいたアイデアとしては、地域の方に昔の地域の写真を有志で持ってきていただいて、模造紙などで作成したマップにおすすめのものを貼っていき、それを展示し、地域の方に来ていただいていろいろ話をしてもらうようなワークショップを考えています。今、私自身まち歩きのガイドをしたりするんですが、ガイドの担い手が少なくなってきました。また、郷土史を読んでいても古い写真があんまりないので、イメージが付きにくくなっています。老若男女で共通しては無しができる話題は、「食」と「地域」だと考えています。年齢層関係なく交流ができると思っています。実施の際は、コミュニティセンターの場所を借りたりして、高松市や各コミュニティセンターのHPにでも掲載して、インターネット上で地域のことを誰でも見られるようにしたらいいのではないかと考えました。

【コミュニティ推進課職員】

資料3のとおり、当課では自治会の加入率を上げるため、また、地域のつながりを地域の方にもう一度確認していただく意味も含め、根本的な見直しをしようということで、地域の方と行政とが一緒になって、自治会をどういうふうに見直していったらいいか話し合っています。その会の中で、どういう取組を新たに実施すればいいかを考えている途中ではあります。今、検討している新規事業としては、色々と考えている状況ではあるのですが、まだ固まっていない状況ではあります。今、御説明いただいた御提案につきましては、地域のつながりということで、良い取組だとは思いますが、行政が実施する研修の中でというよりは、地域の方が実施する研修の中の一環として行われた方がいい取組ではないかとは感じました。

【コミュニティ推進課職員】

具体的な事業化として、こういった経費を想定されていますか。

【委員】

写真については、持ち寄ってもらうので、寄付が一番理想ですがそれが難しければコピー代が発生すると思います。あとマップにするなら模造紙なので、そんなに費用は掛からないと思います。

【コミュニティ推進課職員】

会の進行役などは誰かをお呼びすることを考えられていますか。それとも参加者だけで進めていくイメージですか。

【委員】

できるなら一人ぐらいはファシリテーターがいて、あとは参加者の中でざっくりと話をしてもらう感じだと思います。

【コミュニティ推進課職員】

HPにも掲載するというお話でしたが、持ち寄っていただく写真も掲載許可の取れているものをお願いするということではよろしいでしょうか。

【委員】

はい。

【コミュニティ推進課職員】

あと、市の主催としてではなく、地域の主催ということになると、市から実施の強制ということは難しいので、こういうことをしたいという要望があれば進んでしていただければと思うんです。こういった取組をしたら、地域の中でつながりができるんじゃないですかという提案や紹介はできそうだと考えています。

【副会長】

アイデアのイメージとしては、市主催のイベントという形でよろしかったでしょうか。

【委員】

最初は、市の事業としてできないのであれば、自分の団体で細々と出来る地域からやっていこうかと思っていました。それだと時間がかかるので、市の事業としてやっていただければ、広く知れ渡れるし、移住者や転居者は、そういった地域の情報が欲しいんですけど、なかなかコミュニティセンターの人ともつながれないというのが現状です。

【委員】

後援なんかをしていただくことは難しいんでしょうか。そうすると、ただ自分の団体単体でやるよりは、団体の信頼度も増したりしてやりやすくなるかもしれないと思いました。

【委員】

コミュニティ推進課さんは、今、悩みの種として「コミュニティプランの見直し」を出されていると思うのですが、私の団体として手を挙げたいと思っていて、その課題解決のためのコンテンツの一つとして出していけないのではないかと思います。コミュニティプランは住んでいる人たちが自分事として関わりながら多くの人と議論を重ねる場が、私としてはすごく大事だと思っています。もし仮に私の団体が採択となったときに、このアイデアをコンテンツの一つとして実施するということは大丈夫なんでしょうか。

【コミュニティ推進課職員】

ありだと思います。今、世代間交流だとか担い手不足だといったことは、地域からそういう声を聴くことがあります。ただ地域ごとに事情は様々なので、市が世代間交流をやりましょうというよりは、地域の中でこういったことが足りないという地域に対して、こういう取組をされている人がいるということをつなぎをすとかは行政の役割として可能だと思います。

【副会長】

先ほどのお話であった、後援のような形でのサポートは可能なのでしょうか。

【コミュニティ推進課職員】

サポートは可能です。

【委員】

先ほどもおっしゃられたこういう取組をしている人がいるということ、民間からというよりは、行政から伝えていただいた方が信頼性は高いと思います。

【委員】

私個人としては、最初から自分でやるつもりでしたので、今回の結論として○、△、×はどちらでもいいです。

【副会長】

それでは、関係課としては予算措置をしてまでの実施は難しいということで、実施するとしたら、悩みの種の受託企業とタイアップするか後援を受けながら取り組むかという話でよろしかったでしょうか。それではこの意見交換の結果としては、「×」ということにさせていただきたいと思います。

—意見交換終了—

【会長】

それでは、最後に意見交換の結果を共有したいと思います。B班からお願いいたします。

【事務局】

順番に結果を申し上げますと、No. 8が「×」、No. 10が「○」、No. 16が「○」、No. 20が「×」、No. 30が「△」、No. 38が「×」という結果になりました。

【会長】

A班の結果としては、No.15は「△」で補助金のお話もいただいている中、できることできないことを再度検討することになりました。No.25、27、28についても、U40側で持ち帰って検討する「△」ということになります。ですので、A班としてはU40側で持ち帰ったものを、再度、事務局経由で投げかけさせていただいて再び結論付けを行いたいと思います。

今後ですが、「○」となったアイデアはどうでしょうか。

【委員】

私のアイデアは、今年度から始まる事業が動き出すそうなので、まずは第1回に参加しようと考えています。それを見て、私が関わったらいと考えている世代の子どもたちを、どのように関わらせていけばいいかを関係課と相談しながらやっていく感じだと思っています。

【委員】

私のアイデアは、今の2019年の時点では動けることが少なく、2020年の東京オリパラに向けて聖火リレーが来まして、関係課が苦労しているところとして市民ベースに落とすというところですが、ただ、連携の実績はあるので、ゼロイチから何かを作るよりは、関係課が今持っているものを加速させたりだとか手が届かないところを後押ししていくというところに関わっていくことができるので、そこが決まり次第、精査することになります。

【市役所U40】

質問なんですけど、今日は関係課の参画希望があった人がメインで意見交換をしたのですが、それ以外はすべて会長チャレンジということになるのでしょうか。

【会長】

私たちだけでは事業を実施するということはできないので、まずは私たちの提案に対して参画希望を持っていただく必要があります。「○」のものは進めることができますが、「△」のものは持ち帰って精査すれば○になるかもしれないですが、「×」は市の事業としてはもうできません。ただ、「×」の中でもこういった観点でやりたいというものをお話しいただいて、立案したりしながら事務局とも相談しながら、今年度は難しいかもしれませんが、来年度の夏までに提案書を作りながら、トライするという事は並行してやっていきたいと思っています。

【市役所U40】

先ほどのA班のアイデアについて、提案者の方が全てを抱え込んでしまっているような感じがしました。アイデアを提案されているので一番詳しいのは御二人なので、もうちょっと精査して、その時に大変なところが出てきたら周りに振ってくれたらいいと思います。最終的にこんな形のものがしたいというものがあって、でも、どこの地域でしたらいいのかわからないとか、上手くいっている場所があるならあらかじめ教えてほしいとかいったことを市役所U40でもいいし、直接、関係課に聞くのもいいと思います。話の展開として、提案者に重荷

が集まっているように感じたので、そうではなくみんなでやっていけばいいと思います。それで補助金の枠組みが使いづらいといった話があれば、市側にとって制度の改善のヒントになりえたりもするので、そんな視点で考えていただ相手もいいとも思います。

【会長】

今おっしゃられたことはまさに正解で、第3期の時もプロジェクトリーダーだけでは絶対にできなかったです。最初に持っているアイデアのコアのところを前半の時に一生懸命共有してもらわないと、他の委員は何をサポートしたらいいのかが分からないわけです。そこだけ共有していただければ、他の人へもお願いがしやすくなると思います。

3 閉会

(事務局から事務連絡の後、閉会)



